

# 辻井遺跡

## — 第41次発掘調査報告書 —

2019

姫路市教育委員会

## 序

姫路城の北西約2.2kmに位置する辻井遺跡は戦前からその存在がすでに知られており、また昭和15年に縄文人骨が出土したことはあまりに有名です。

本書は、辻井遺跡で平成30年8月から約1ヶ月におよんだ発掘調査の成果をまとめたものです。今回の調査では、弥生時代や鎌倉・室町時代にかけての遺構を調査しました。これらは、一見すると派手さには欠けますが、このような地道な調査成果の積み重ねが、やがては地域の歴史をより豊かにするものであると考えております。

最後になりましたが、今回の発掘調査の実施にあたり多大なご協力を賜りましたミサワホーム近畿株式会社をはじめ、関係各位に心から御礼申し上げます。

平成31年3月  
姫路市教育委員会  
教育長 松田克彦

## 例言

1. 本書は、姫路市辻井に所在する辻井遺跡（県遺跡番号020162）第41次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、姫路市辻井七丁目494番1の一部、497番1の一部、498番4、494番1地先水路における宅地造成工事に伴い、ミサワホーム近畿株式会社と委託契約を締結し、姫路市教育委員会が実施した。現地での発掘調査は、姫路市埋蔵文化財センター福井 優が担当した。
3. 発掘調査は、平成30年8月17日から同年9月13日にかけて実施した。調査面積は225m<sup>2</sup>である。
4. 本書の編集・執筆は福井が行った。
5. 遺構および遺物写真は福井が撮影した。
6. 本報告にかかる調査の記録、出土遺物などは、すべて姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
7. 発掘調査・報告書作成に際して、下記の方々にご援助を頂きました。記して感謝申し上げます（敬称略）。

ミサワホーム近畿株式会社 代表取締役 横田 純夫

## 凡例

1. 発掘調査で行った測量は、世界測地系（測地成果2000）に準拠する平面図直角座標系第V系を基準とし、数値はm単位で表示している。
2. 本書で用いる標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、使用する方位は世界測地系の座標北である。
3. 本書で使用した地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図（姫路南部）・（姫路北部）・（龍野）および姫路市基本地形図を使用した。
4. 遺構の略称は、以下のように呼称している。  
SK：土坑、SP：柱穴・小穴、SD：溝、SX：性格不明
5. 遺構・土層等の呼称は、調査時の遺構番号を基本とする。そのため、遺構の名称は必ずしも帰属する時代の年代順を反映していない。
6. 土色と土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編2003『新版 標準土色帳 25版』日本色研事業株式会社に準拠した。
7. 土器の図化に関しては、小片の場合でも復元的に図化したものも掲載している。
8. 遺物番号は基本的に通し番号とする。
9. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・写真図版ともに一致する。

## 目次

序・例言・凡例	
<b>第1章 調査の経緯</b>	<b>1</b>
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 本発掘調査	1
<b>第2章 調査の成果</b>	<b>1</b>
第1節 調査の概要	1
第2節 遺構・遺物	1
<b>第3章 まとめ</b>	<b>3</b>

## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

#### 調査の経緯

平成29年(2017年)に姫路市辻井七丁目494番1の一部他において、宅地の造成計画(対象面積約1116m<sup>2</sup>)が持ち上がった(図版1)。当該地は当初、周知の埋蔵文化財包蔵地に該当していなかったが、辻井遺跡(県遺跡番号020162)に近接しているため、施工中に立会調査を実施することになった。平成30年(2018年)2月28日に立会調査を行ったところ、耕作土直下で確認した地山上で土坑2基とピット3基を検出したことにより、当該地にも辻井遺跡が広がっていることが明らかになった(遺跡調査番号20170514)。このため、改めて事業者と協議のうえ、本発掘調査を実施することとした。

### 第2節 本発掘調査(第41次調査)

#### 第41次調査

本発掘調査に際して、姫路市とミサワホーム近畿株式会社との間で委託契約を結び、姫路市埋蔵文化財センターが調査を実施した。調査対象は、土留擁壁や下水道管等の設置・敷設工事により地下の遺構・遺物に影響が及ぶ範囲とした。調査面積は225m<sup>2</sup>である(図版1)。また、耕作土と床土(土壤化層)および遺物包含層と考えられる土層については主に重機による掘削を行い、遺物の採集にとどめた。それより下位については、人力によって精査した。

現地での発掘調査から整理作業終了までの調査体制は以下のとおりである。

姫路市教育委員会事務局

姫路市埋蔵文化財センター

教育長 松田 克彦

館長 前田 光則

教育次長 名村 哲哉

課長補佐 岡崎 政俊(庶務)

生涯学習部長 岡田 俊勝

係長 森 恒裕(調整)

文化財課長 花幡 和宏

技術主任 福井 優(調査)

課長補佐 大谷 輝彦(調整)

技師 黒田 祐介(調整)

## 第2章 調査の成果

### 第1節 調査概要

#### 基本土層

調査地の現況は耕作地で、標高は約20.5mを測る。図版4は調査区の土層断面である。層名は、耕作土をI層、旧耕作土をII層とし、遺構埋土をIII層、地山である黄褐色土層をIV層とした。ここで、IV層のレベルについてみてみると、ほとんどの箇所で概ね標高20.4mを測る。これにより、当該地においては水平な安定した旧地形を復元しても大過ないと考えられる。

#### 検出遺構

今回検出した主な遺構は、堅穴建物2棟、土坑14基、ピット58基、溝9条である。以下、遺構ごとにみていくことにする。なお、既に凡例でも述べたように、本書の遺構名は調査時に付したものを使用しているために、遺構名は必ずしも時代順ではないことを付言しておく。

### 第2節 遺構・遺物

#### SK1(図版5)

#### 形状・規模

SK2と重複し、また調査区外に広がっているために全体像は不明である。ただ、北東側でコーナーを確認したことから、その平面形は方形思われる。そして、南北辺は46m以上あることはわかった。また、本遺構については工事の影響をほとんど受けないこと

が明らかであったため、平面形の把握に努めるとともに、部分的にサブトレンチを設定することにより最小限の調査にとどめた。なお、試掘調査時には堅穴建物であることを想定していたが、屋内炉や周壁溝、柱穴といった堅穴建物に通有な屋内施設を確認することができなかつたために、その可能性を指摘するに留めておく。

- 出土遺物** 底面からわずかに遊離した状態で、須恵器杯身(1)が出土した。
- 時 期** 古墳時代後期(TK217もしくはTK209)に位置付けられる。
- SK2 (図版5)**
- 形状・規模** SK1と重複している。未掘部分を挟んで、東西約4.9m、南北約3.4mの平面隅丸長方形を呈する。
- 屋内施設** 未掘部分以東では、遺構の外郭線に沿って幅約25cm、深さ約10cmの溝状の遺構が巡っている。一見すると堅穴建物の周壁溝とも思えるが、未掘部分以西ではみられないことからここではあくまで想定に留めたい。その他に主柱穴などの施設も未確認である。
- 出土遺物** 土師器と須恵器の小片が少量出土している。
- 時 期** SK1出土須恵器の年代観に近いと考えられる。
- SK6 (図版6-1)**
- 形状・規模** 平面形は長軸約1.8m、短軸約1.4mの橢円形を呈し、検出面からの深さは約15cmを測る。
- 出土遺物** 弥生土器の壺(2)、甕(3・4)、高杯(5)が出土した。
- 時 期** 弥生時代後期に位置づけられる。
- SK8 (図版6-2)**
- 形状・規模** 平面不整形な方形の可能性がある。湧水が激しかったために検出は困難であったが、幅は約1.5m以上、深さは10cmにみたない。なお、未掘部分を挟んだ西側にも平面隅丸方形と思われる遺構を検出したが、同一のものかの判断はつかない。同一面からの掘り込みである点、底面のレベルが近い点からその可能性を指摘しておく。
- 出土遺物** 備前焼壺(6)・土師器甕(7)が出土した。
- 時 期** 14世紀末以降のものと思われる。
- SK10 (図版7-1~3)**
- 形状・規模** 平面は不整形な円形と思われる。確認できる最大幅は約1.6m、深さは南側で約7cm、北側で約14cmを測る。
- 出土遺物** 須恵器杯A(8)が出土した。
- 時 期** 7世紀後半から8世紀代にかけての時期と思われる。
- SX2 (図版7-4~6)**
- 形状・規模** 平面形は長軸約1.3m、短軸約1mの橢円形を呈し、検出面からの深さは10cmに満たない。埋土が地山起源の円礫の間隙に溜まっていたことに加えて、湧水があったために分層は困難であった。また、深さが10cm未満と非常に浅く、浅くたわむのような断面形を呈していた。性格は不明である。
- 出土遺物** 弥生土器の壺と思われる底部が出土した。
- 時 期** 概ね弥生時代後期に位置づけられよう。
- SD1 (図版8-1~3)**
- 形状・規模** 調査区の北辺を概ね東西方向に走行する。北側の肩については別の遺構に切られたり、既に既設擁壁に伴う削平を受けたりしているために溝幅については不明である。今回の調査で確認できた部分では最大上幅約1.6m以上を測る。埋土は比較的安定したシルト～粘土質で、溝浚えのような痕跡はみられなかったことから、徐々に溝底が上昇し

ていき埋没した過程を想定することができる。また、部分的に設定したサブトレーンチでの調査では、底面のレベルが西側より東側の方が 10cm 程度高かったものの、全体像が把握できていない現状では水流の方向は不明といわざるを得ない。

**出土遺物** 部分的な調査ではあったものの、土師器壢や須恵器大甕と思われる小片が比較的多く出土した。このうち図化できたのは土師器壢(10)、瓦質土器壢(11)とともに、須恵器杯B(12)もみられた。

**時 期** 溝の埋没時期については 14 世紀後半以降と思われるが、12 のように辻井廃寺の活動時期に近い遺物が出土した点は注意を要する。

#### SD2 (図版8-1・4・5)

**形状・規模** 幅約 70cm、深さ約 25 cm を測る。SD1 に概ね平行している。

**出土遺物** 土師器壢 (13) が出土した。

**時 期** 出土遺物から時期の特定は困難であるが、おおむね中世に収まると考えられる。

#### SD4 (図版8-6~9)

**形状・規模** 概ね南北方向に走行する。幅約 1m、深さ約 40 cm を測る。

**出土遺物** 古式土師器広口壺 (14)、甕 (15) が出土した。また、SD4・5 檜出時に須恵器杯蓋 (16) が出土した。

**時 期** 少ない遺物からの推定は難しいが、14・15 がそれを示すとすると、古墳時代初めに比定できよう。

#### SD5 (図版8-6・7)

**形状・規模** SD4 に切られる。幅は 14m 以上、深さは約 25 cm を測る。SD4 と SD3 に切られる。

**時 期** SD3・4 よりも先行するものであることはわかる。

#### ピット

58 基を検出・調査したが、有機的な関係性を伺わせるものではなく、また、遺物も極小片が出土するのみで、時期についても判然とするものはなかった。

### 第3章 まとめ

最後に今回の調査成果を時代ごとにまとめておきたい。

**弥生時代** 今回の調査では、竪穴建物のように生活痕跡を示す遺構はなく、僅かに弥生時代後期の土坑(SK6・SX2)を検出したにとどまる。しかし、これまでの調査成果ではほとんどみられなかった後期の資料を得ることができた。今後は集落域の移動も視野に入れ、さらなる資料の蓄積を待ちたい。

**古墳時代** SD4 出土資料(14・15)や SK6(2)のように数量こそ少ないが、前期初頭と思われる資料を得ることができた。先述の弥生時代後期の資料とともに弥生時代中期後半以降の辻井遺跡の動向を考えるうえで、貴重な成果をいえる。

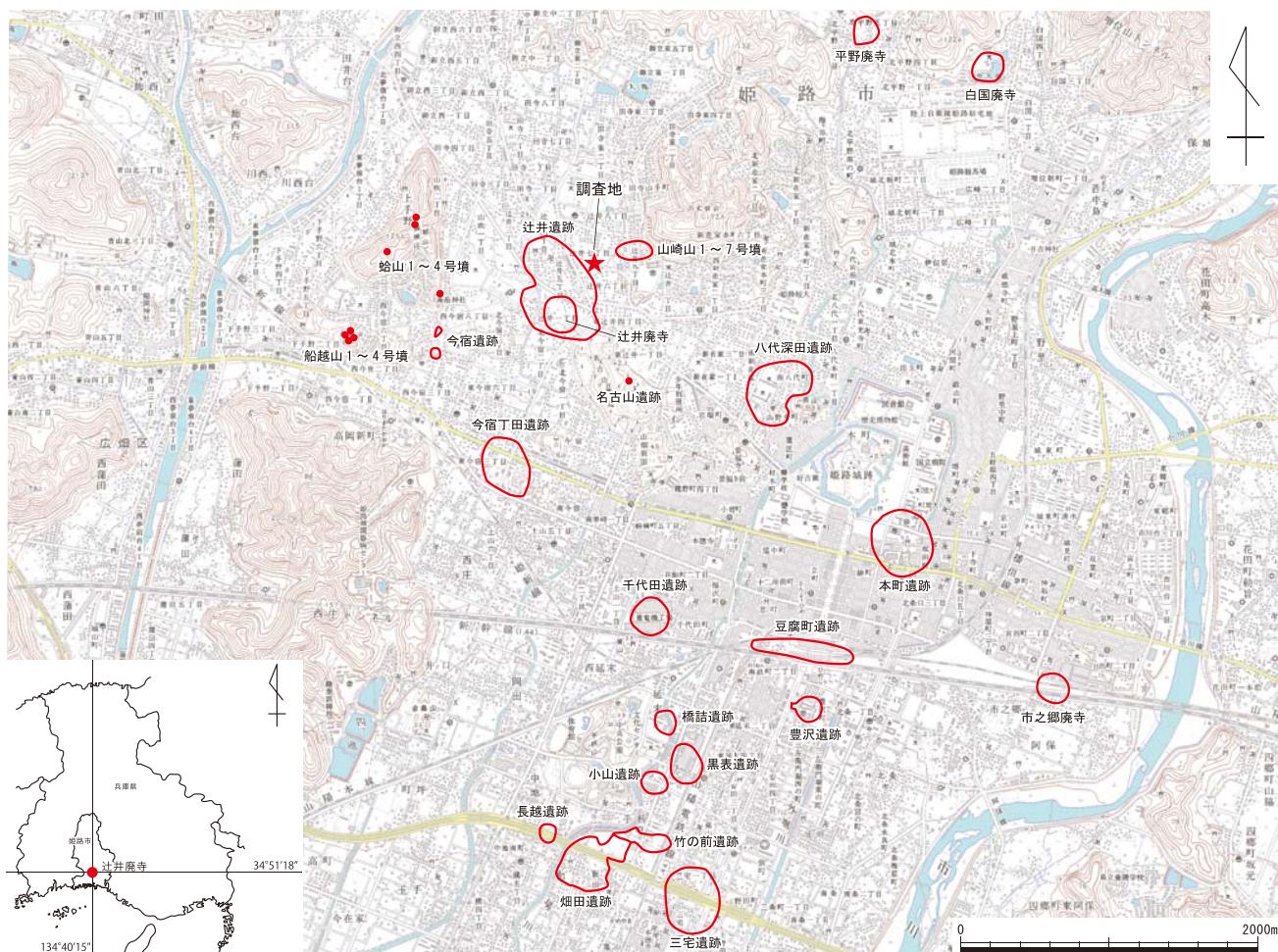
また、SK2 のように辻井廃寺直前の集落域の可能性のある遺構を確認できたことは寺院の造営にかかる貴重な成果といえる。

**奈良時代** 今回の調査では遺構はなかったものの、SD1(12)や SD4・5(16)のように辻井廃寺活動時の遺物の分布が広がったことは、廃寺周辺の様相を考えるうえで良好な資料を得たといえよう。

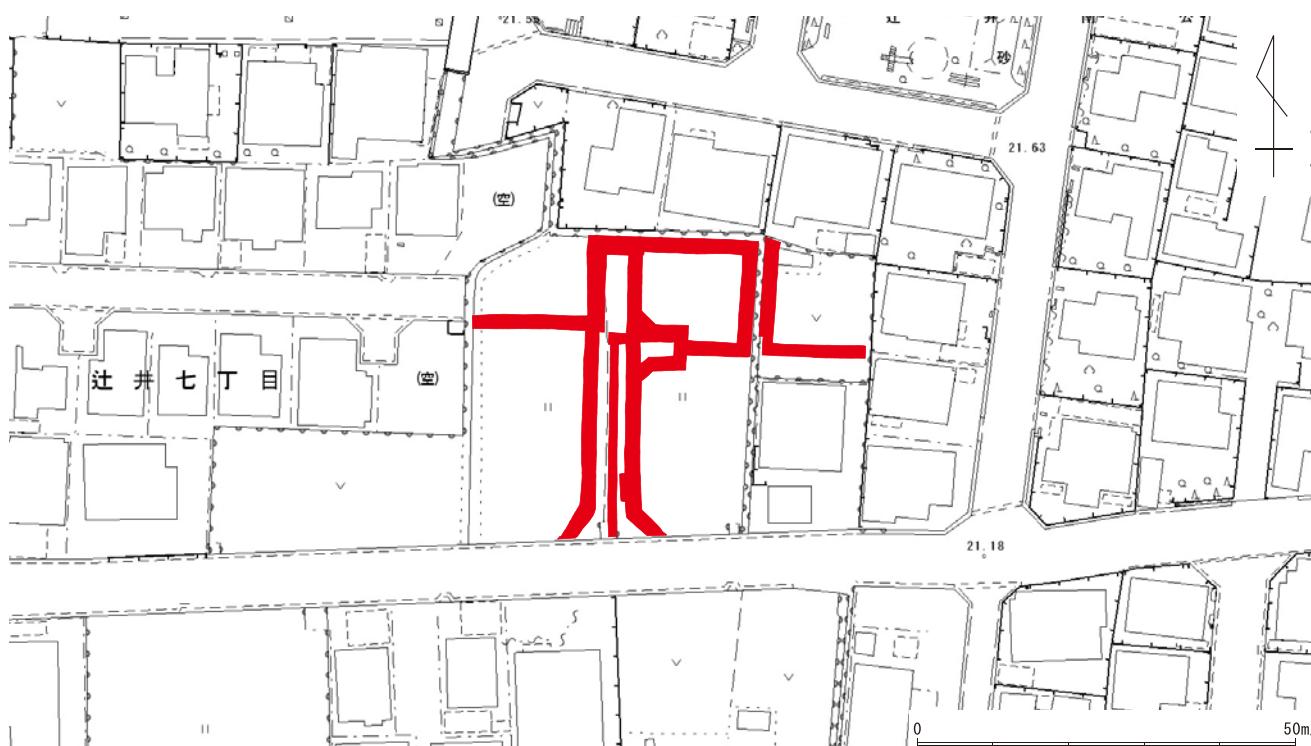
**室町時代以降** 当該期の遺構が溝や浅い土坑のみで遺物も少なかったことから、時期の特定については今後の資料の増加を待ちたい。

【引用・参考文献】今里幾次 1971『姫路市辻井遺跡 - その調査記録 -』古代播磨研究会、今里幾次・大谷輝彦 2010「T07 辻井廃寺」姫路市史編集専門委員会編『姫路市史』第七巻下資料編考古 姫路市、大手前大学史学研究所編 2007『弥生土器集成と編年 - 播磨編 -』六一書房、松本正信・加藤史郎 1971『辻井遺跡発掘調査報告書』姫路市教育委員会

図版 1

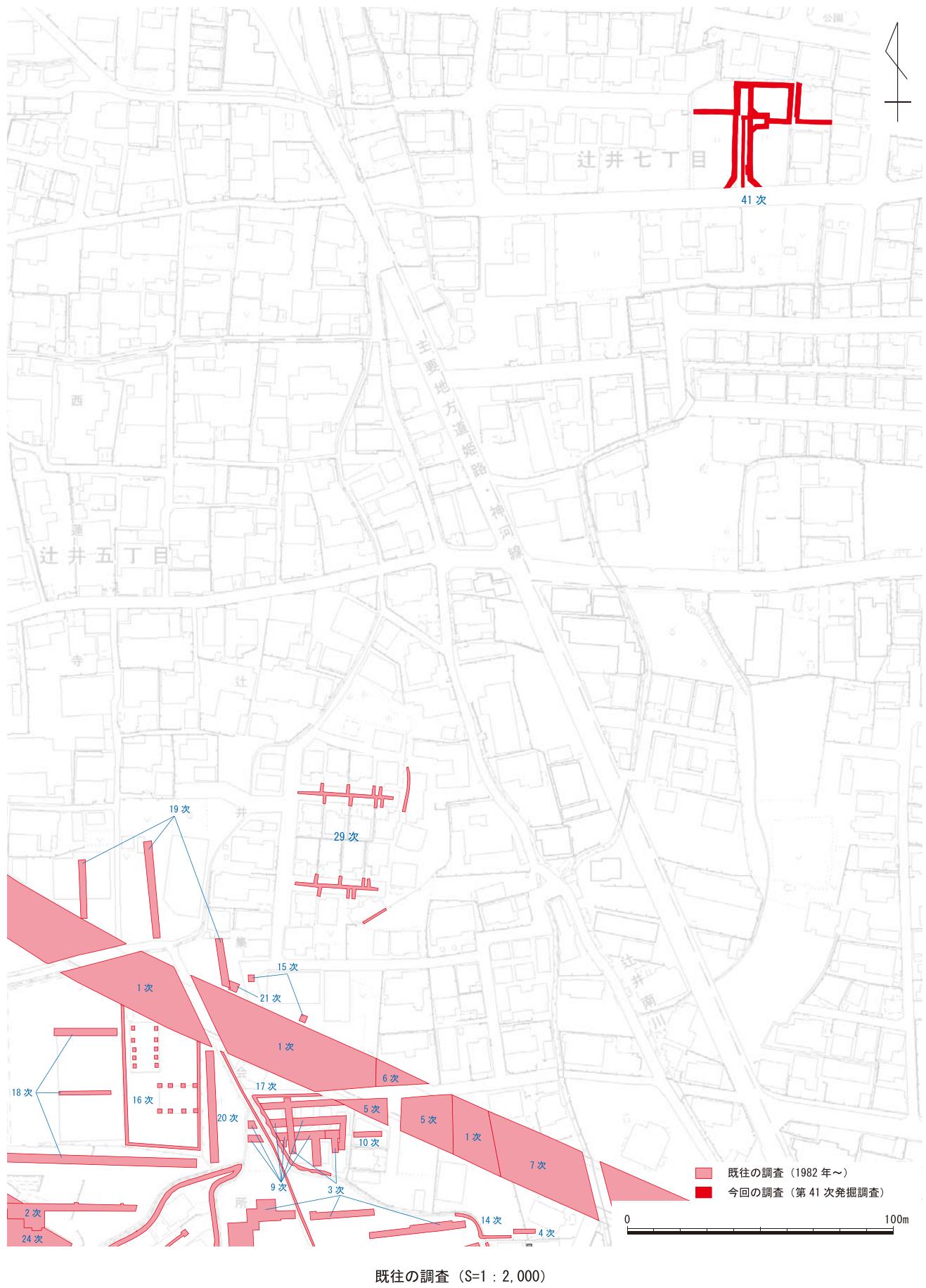


1. 周辺の主な遺跡 ( $S=1:50,000$ )

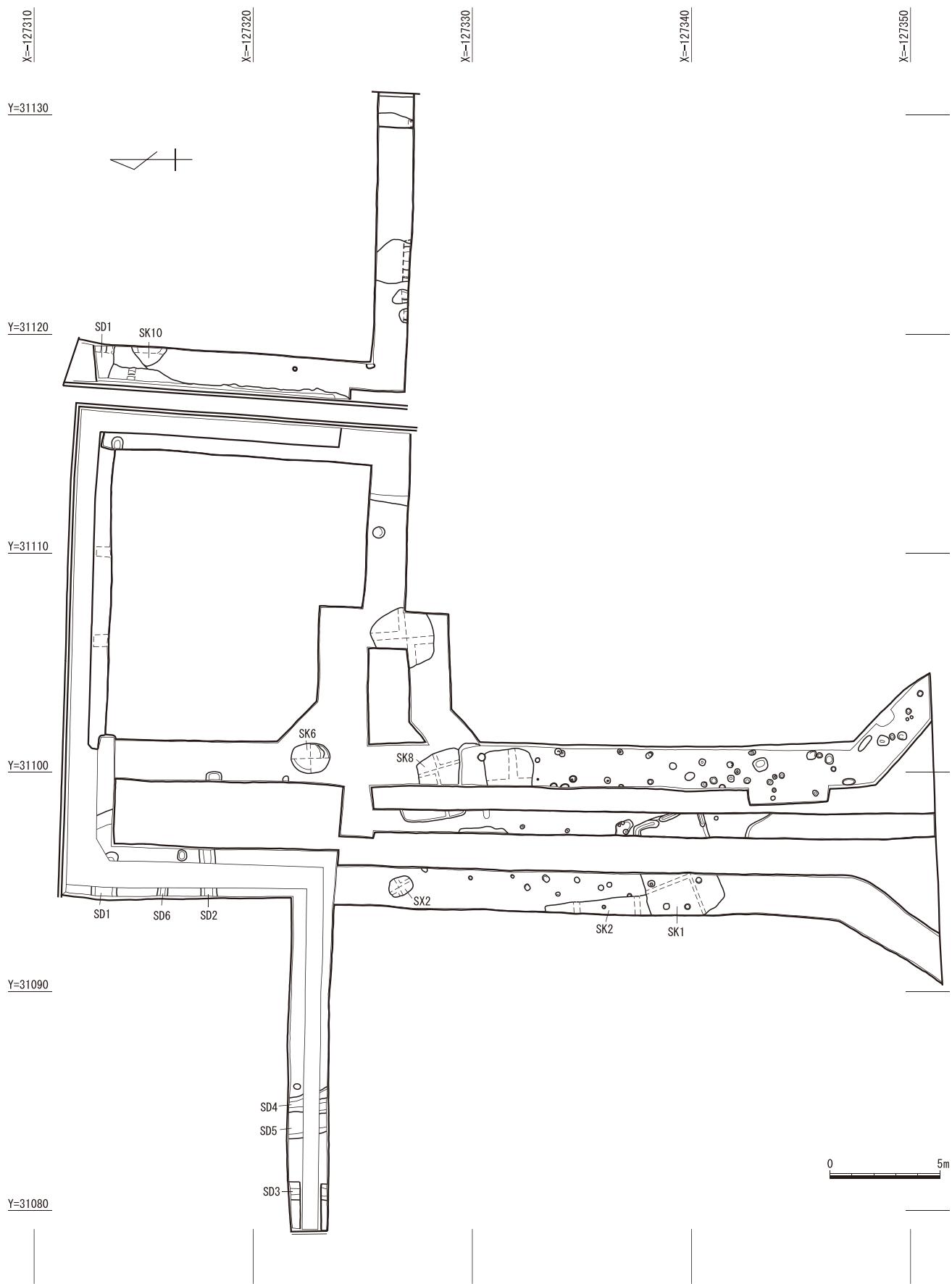


2. 調査区配置図 ( $S=1:1,000$ )

図版2

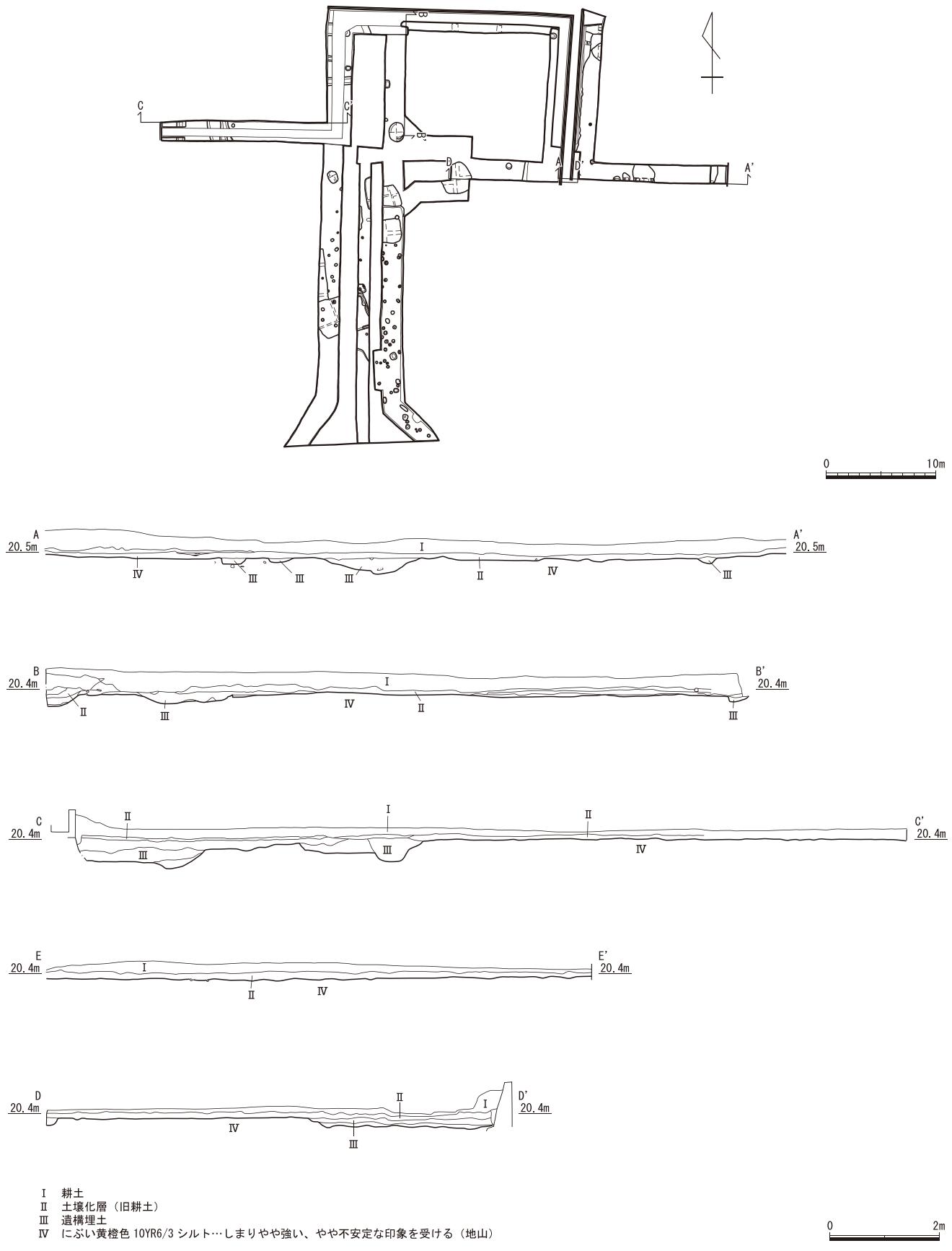


図版3

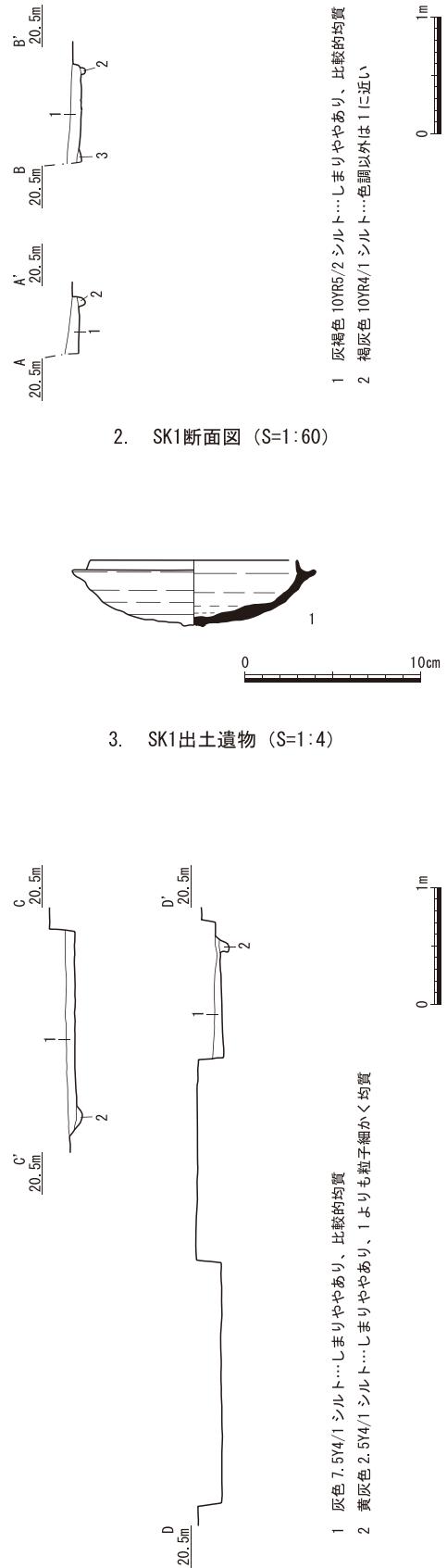
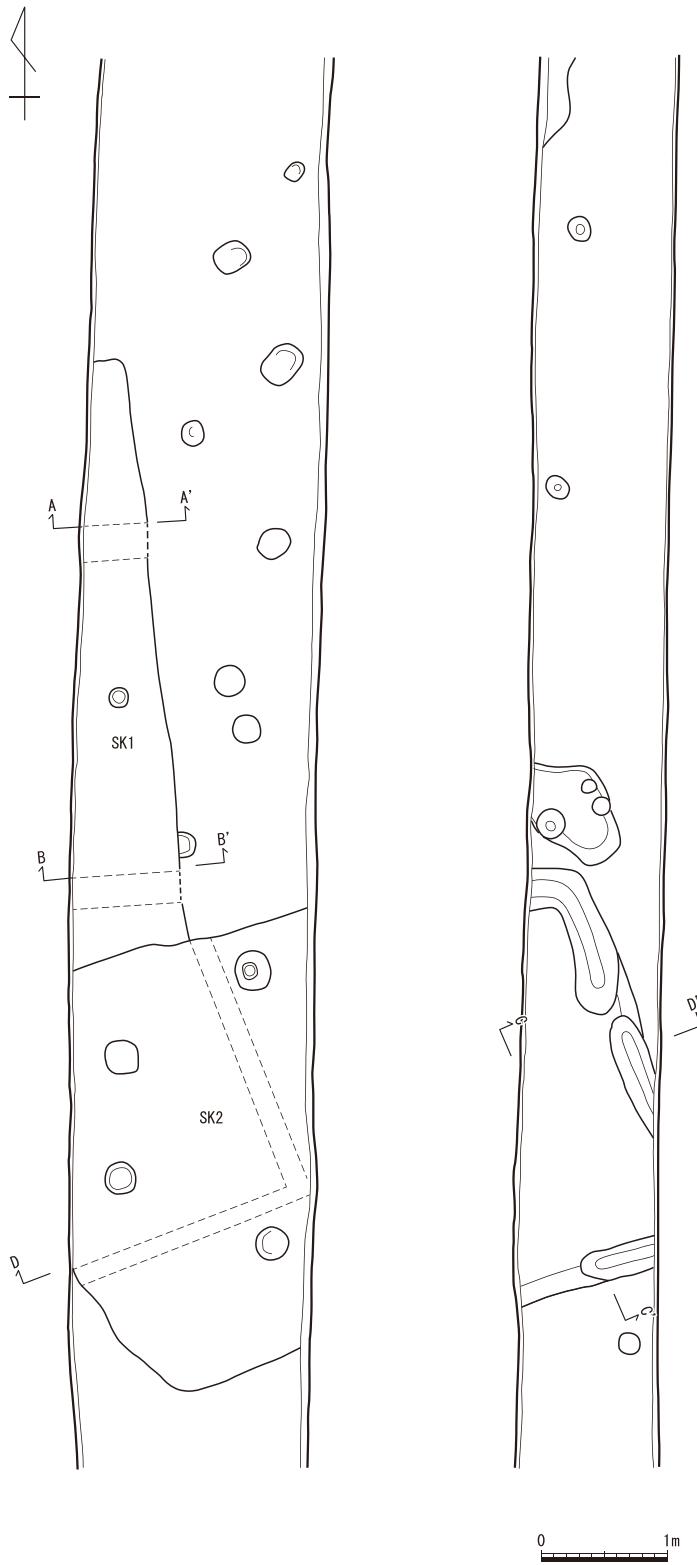


調査区全体図 (S=1:250)

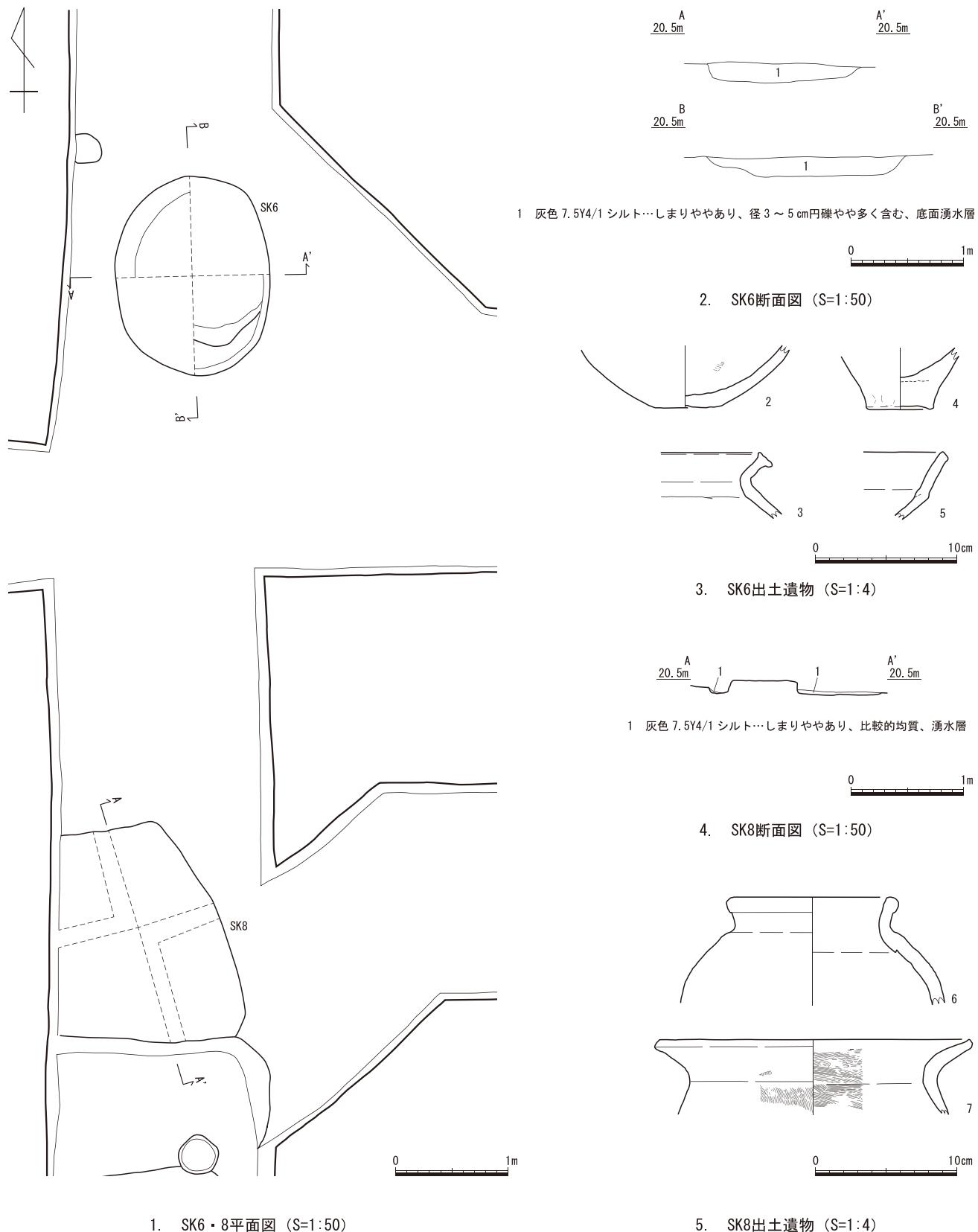
図版4

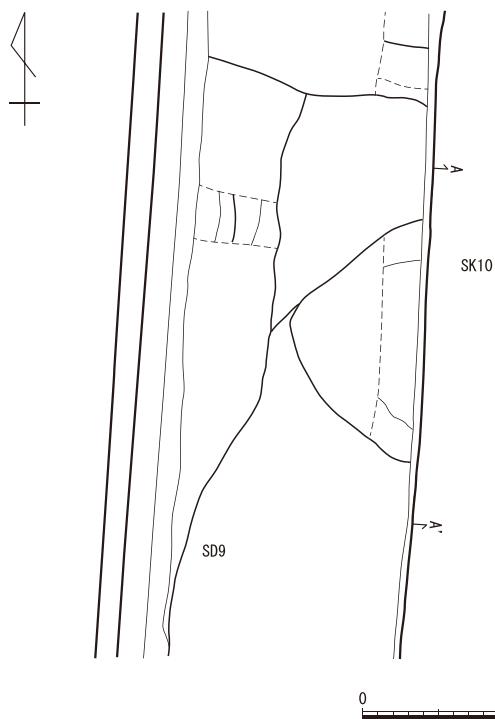


調査区土層断面 ( $S=1:100$ )

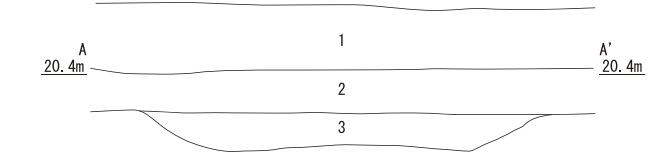


図版6





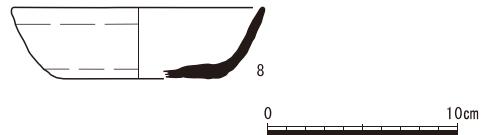
1. SK10平面図 (S=1:50)



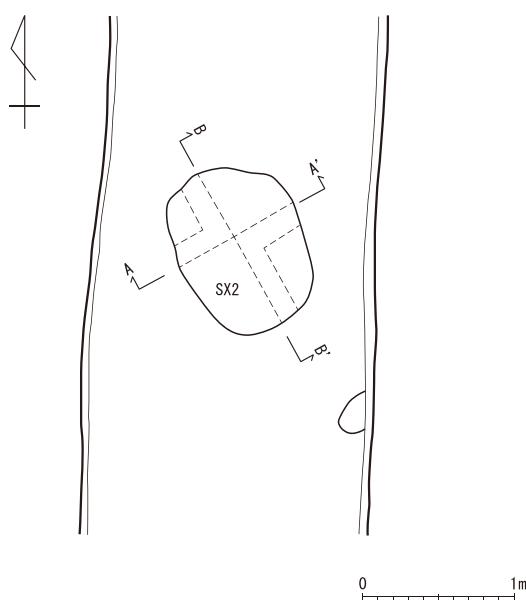
1 褐灰色 10YR4/1 シルト…しまりややあり、径 5 cm円礫少量含む、底面湧水層  
2 にぶい黄橙色 10YR6/3 シルト…しまりやや強い、やや不安定、部分的に下位の砂礫層が  
上ることにより径 3 ~ 5 cm円礫を含むことがある (IV層)



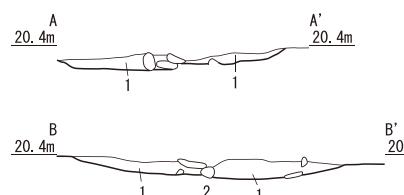
2. SK10断面図 (S=1:30)



3. SK10出土土器 (S=1:4)



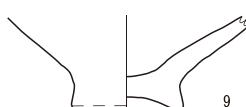
4. SX2平面図 (S=1:50)



1 灰色 5Y4/1 磯混じりシルト…しまり弱い、径 5 ~ 10 cm円礫やや多く含む、底面湧水層  
2 にぶい黄橙色 10YR6/3 シルト…しまりやや強い、やや不安定、部分的に下位の砂礫層が  
上ることにより径 3 ~ 5 cm円礫を含むことがある (IV層)

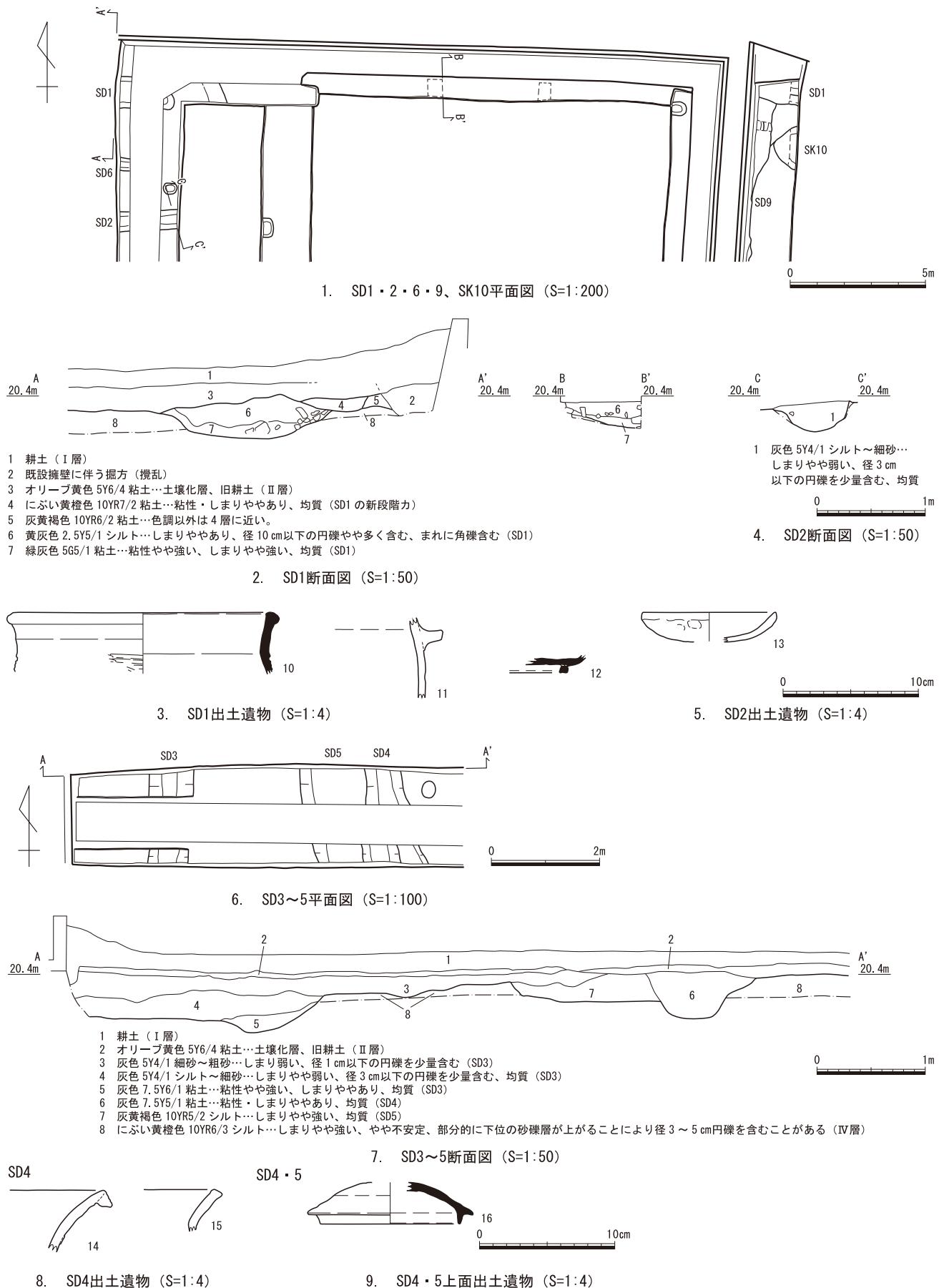


5. SX2断面図 (S=1:30)



6. SX2出土土器 (S=1:50)

図版8





1 調査地全景（南西から）



2 SK1・2全景（北から）

写真図版2





## 報告書抄録

ふりがな	つじいいせき							
書名	辻井遺跡							
副書名	第41次発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第81集							
編著者名	福井 優							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	平成31年（2019年）3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つじいいせき 辻井遺跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 つじい7ちょうめ 辻井七丁目 494ばん1のいちぶほか 494番1の一部他	28201	020162	34° 51' 18"	134° 40' 15"	2018.8.17 2018.9.13	225m <sup>2</sup>	宅地 造成
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			遺跡調査番号		
集落跡	縄文時代・ 弥生時代・ 奈良時代	土坑・ ピット・溝	弥生土器、土師器、須恵器			20180187		
要約	弥生時代後期の土坑2基、古墳時代初頭と思われる溝をそれぞれ確認した。いずれも辻井遺跡での既往調査ではほとんど確認することのなかった時期の遺構・遺物である。また、古墳時代後期の堅穴建物の可能性がある土坑状の遺構を2基確認した。辻井廃寺造営直前の集落の様相を考える上での重要な発見といえる。寺院の活動期の遺構は確認しなかったものの、当該期の須恵器がごく少数ではあるが出土した。							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第81集

**辻井遺跡**

- 第41次発掘調査報告書 -

平成31年（2019年）3月31日発行

編集 姫路市埋蔵文化財センター  
 〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1  
 TEL (079)252-3950

発行 姫路市教育委員会  
 〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 松尾印刷株式会社  
 〒671-0222 兵庫県姫路市別所町小林494